



No. 133

ティ ー ブ レ イ ク

Tea Break

案ずるより産むが易し

基本書を読み込むごとに、そこから読み取れる事項が異なる。重要だと思った箇所が違ってくる、というようなことは、弁理士試験の勉強の過程でも、よくあることである。であるから、たとえ同じ文章であっても、隣の人が同じように読んでいるとは限らない、同じように解釈し味わっている保証はない、というのも、これまた真実である。

同様に、例えばスキーをしたことがない人がスキーの本を読んだとしても、スキーをしながら読んでいる人とは、違った読み方をしているはずである。言い換えれば、スキーをしていない状況で読んだときには何となく読み飛ばしていたものが、いざスキーをしてから読んでみると、これまた重要なところを読み飛ばしていたことに気付くのである。

スキーをしたことが無い状態でスキーの本を読んだのでは、スキーというのは所詮「想像の世界」に過ぎない。想像の世界で重要と思ったことは、現実世界でのそれとは異なる。やはり人間というのは、「実際にやってみなければ分からない」ものであり、「現実に体験したものでなければ、その真なるところは分からない」ものなのである。

巷にあふれている成功本。ノウハウやハウツーが満載されているものの、例えば「起業して成功する本」ひとつをとっても、実際に起業をしていないのであれば、そこに書かれている「真に重要なこと」を読み取ることはできない。ある意味、そこに書かれている「とても重要なこと」というのは、読み飛ばされてしまうことである。

う。

であるから、成功本を読んで「いける！」と思ったとしても、成功するとは限らず、それを過信したことによって生まれる悲劇もある。

また、私のように親不孝をしてきた者など、実際に子を持って、想像の世界から現実の世界へと脱皮した後の後悔は、それこそ筆では書き尽くしがたいものがある。

では、これに対する処方箋というのはないものだろうか。それは、在るようで無く、無いようで在るのかもしれない。今のところ、多くの人々は、受験勉強のときのよう、一度決めた基本書を「ことあるごとに何度も読み込む」一方で、本に書いてあることを過信せずに、現実のほうをしっかりと見て素直に対応する、という手法で何とかやりくりをしているのではあるまいか。

先日も、結婚に関する相談を受けた。色々な人が色々なことを言うので、どうすべきなのかで悩みが生じることがあるという。けれどもこれも、想像の世界に居るだけでは何も分らない。

唯一の現実とは、「結婚をしたい」と思えるような相手が、自分の前に現れ、今そこに居るということである。人がとやかく言うことよりも、現実のほうをしっかりと見て素直に対応すること、より具体的には、他人と話す時間よりも、目の前の相手と話す時間を多くとるようにすることのほうが、よほど意味があり、かつ現実的なのではなかろうか。

(正)